

実生活で必要とされる文章の構成を考えて書く力を育てる学習活動の工夫 — 「構成ステップシート」を活用した課題発見・解決学習を通して —

甘日市市立大野西小学校 小田 薫

研究の要約

本研究は、実生活で必要とされる文章の構成を考えて書く力を育てる学習活動の工夫について考察したものである。文献研究から、実生活で必要とされる文章の構成を考えて書く力を、書く状況等に合った文章の構成を考えて選択し、必要に応じて改変して書く力とした。この力を育てるために、第6学年において、「構成ステップシート」を活用し、課題発見・解決学習の五つの条件（⑦パフォーマンス課題を設定すること ①課題をよく理解させること ⑦既有知識、既習事項と関連付けさせること ⑤複数の文脈で考えさせること ④自分の学習をメタ認知させること）を踏まえた課題発見・解決学習を行った。その結果、実生活で必要とされる文章の構成を考えて書く力が高まった。このことから、「構成ステップシート」を取り入れた課題発見・解決学習を行うことは、実生活で必要とされる文章の構成を考えて書く力の育成に有効であるといえる。

キーワード：「構成ステップシート」 五つの条件を踏まえた課題発見・解決学習

I 研究題目設定の理由

平成26年度広島県「基礎・基本」定着状況調査（以下「基礎・基本」とする。）小学校国語タイプIの「文章の構成」の県平均通過率は50.7%と低い。この問題は、実生活で報告文を書く場面を設定し、その構成を問うたものである。誤答の要因は、文章の構成の知識を習得していても、実生活の場面で活用できないことがある。よって、実生活で目にする様々な文種の構成の特徴を理解させるとともに、既習事項等を活用し、実生活の複雑な文脈に応じた文章の構成を考えて、書く力を育てる必要がある。

そこで、本研究では第6学年の「書くこと」の学習活動において、実生活の複雑な文脈を設定したパフォーマンス課題を単元全体の課題とする課題発見・解決学習を行う。こうした学習を仕組むことで、実生活の複雑な文脈と文章の構成の既習事項等を関係付ける必然性が生まれ、文章の構成を考えて書く力を育てることができると考える。また、このような学習をより効果的に進めるために本研究では「構成ステップシート」を提案する。

「構成ステップシート」を活用した学習活動により、文章の構成を考えて書く力が他教科や実生活にも活用できる力として育てることができると考え、研究題目を設定した。

II 研究の基本的な考え方

1 実生活で必要とされる文章の構成を考えて書く力について

（1）書く力について

小学校学習指導要領解説国語編（平成20年）には、改訂の趣旨として、実生活で生きてはたらき、各教科等の学習の基本ともなる国語の能力を身に付けさせることと述べられ、国語科の各領域の内容に、実生活の様々な場面における言語活動例が示されている⁽¹⁾。

「書くこと」の領域においては、例えば第5学年及び第6学年では「調査や研究を報告する文章、解説したり提案したりする文章」などが示されており、実生活の様々な場面を想定した各学習を通して、実生活で使える書く力を身に付けさせることが求められている⁽²⁾。

書く力を身に付けさせることに関して、田中一郎（2013）は、書く力として、文章の様式に合った文章の構成を理解する力と文章様式の特徴に合わせた書く力との二つを挙げている⁽³⁾。佐渡島紗織（2009）は、文章の構成の指導に関して「与えられた状況のもとではどのような展開が有効かを生徒自身が考えて選択できるような授業の流れが期待される。」⁽¹⁾

と述べている。田中、佐渡島の指摘を整理すると、書く力、とりわけ文章の構成に関する書く力には、文章の構成を理解する力、状況に応じた文章の構成を考えて選択する力、選択した文章の構成を使って書く力の三つの要素が含まれていることが分かる。これらは構成から記述という書く過程に沿った適切な指摘といえる。よって本研究では書く力を状況に合った文章の構成を考えて選択して書く力とする。

(2) 実生活の場面での書く力とは

児童は、発達段階に応じて、様々な文章の構成のモデルを学び理解している。そして、授業では、教師の指示に従って既習の文章の構成のモデルを想起し、そのモデルどおりに書いている。しかし、実生活では、多くの場合、文章の構成のモデルが示されることはない。また、必ずしも学習した文章の構成のモデルにそのまま当てはめて書けるような場面ばかりでもない。実生活の書く場面では、児童自身が、既習の文章の構成からより適切な文章の構成を選んだり、選んだ文章の構成を、書く状況等に合わせて必要に応じて改変して書いたりすることが必要だといえる。

(3) 実生活で必要とされる文章の構成を考えて書く力とは

前述の（1）（2）より、本研究では、実生活で必要とされる文章の構成を考えて書く力を、書く状況等に合った文章の構成を考えて選択し、必要に応じて改変して書く力とする。

2 「構成ステップシート」を活用した課題発見・解決学習について

(1) 課題発見・解決学習について

広島県教育委員会（平成26年）は、広島版「学びの変革」アクション・プラン（以下「アクション・プラン」とする。）において、コンピテンシーを「グローバル化と近代化により、多様化し、相互に繋がった世界を生き抜くために必要な能力で、単なる知識や技能だけでなく、態度を含む様々な資質・能力を活用して、複雑な要求（課題）に対応することができる実践的な能力」²⁾と定義し、その育成に向けて課題発見・解決学習を指向した授業改善を推進している。松尾知明（2014）は、社会で生きて働くコンピテンシーの育成に向けて「実生活や実社会のリアルな課題に向き合って問い合わせを立て、自分の考えをもち、仲間と協調して自律的に問題解決していくような授業デザインが期待されるだろう。」³⁾と述べ、コンピテンシーの育成に向けて、問題解決的な学習が有

効であることを示している。また、村田耕一ら（平成28年）は、教科の学習において育成することが求められるコンピテンシーを「教科の知識・技能や態度を含む様々な心理的・社会的なリソースを活用して、他者と関わり合いながら、特定の文脈の中で複雑な学習課題を解決する資質・能力」⁴⁾と定義し、その育成に向けて課題発見・解決学習が必要であると述べている。さらに、「育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会－論点整理－」（平成26年）では、これから求められる学習について、子供たちの理解を促すために、まず興味を喚起する動機付けを行い既存知識だけでは十分ではないという課題意識をもたせ、必要となる知識や技能を習得しながら課題解決に向けた学習活動を行うことの重要性が述べられている⁴⁾。

四者に共通するのは、実生活の複雑な課題を解決するために必要なコンピテンシーの育成には、児童自身が課題を発見し、解決していく学習の過程を重視した課題発見・解決学習あるいは問題解決的な学習が必要だということである。

本研究で育成を目指す実生活で必要とされる文章の構成を考えて書く力も、実生活での書く場面の複雑な文脈に応じて書く力であることからコンピテンシーの一つと考える。

以上のことから、実生活で必要とされる文章の構成を考えて書く力の育成においても児童自身が課題を発見し、解決していく学習の過程を重視した課題発見・解決学習が有効だといえる。

(2) 課題発見・解決学習の条件について

課題発見・解決の学習過程を取り入れた単元のモデルについては多くの研究者から提案されている。そして、それらのモデルに基づいた実践が多くの学校でなされ、成果を上げつつある。しかし、一方で、「型」を取り入れればよい、この方法を実施しておけば見直しの必要はないなど、「型」に着目し過ぎた理解がなされているとの懸念が「アクティブ・ラーニングの視点と資質・能力との関係について－特に深い学びを実現する観点から－」（平成28年）で述べられている⁵⁾。また、村田ら（平成28年）は、現在実践されている課題発見・解決学習の中で、成果を上げていない実践の課題を「これらの実践は、単元の構成、授業の展開が課題発見・解決学習的な配列であるだけで、生徒は、既存知識や各学習で理解した内容を自ら関連付けて課題を発見したり、解決をしたりする深い学びを行っていない。よってコンピテンシーの育成にはつながらない。」⁵⁾と指摘す

る。このような「型」どおりに教師主導で進められる課題発見・解決学習では、教師の提示した課題の解を知識として習得したり、教師の指示した解決方法を知識、技能として習得したりしても、それらの知識、技能は、ある学習の文脈に限定された知識、技能にとどまり、実生活等で生きて働くものとはならない。重要なのは課題発見・解決学習をどのような単元モデルに基づいて行うのかではなく、どのような課題が設定され、児童たちによってどのように課題が解決されていくかという課題発見・解決の学習過程の質を問うことであると考える。

石井英真（2015）は、子供たちの学力を「知っている、できる」「わかる」「使える」と整理し、実生活で使える学力の育成に向けて、実生活のリアルな文脈によるパフォーマンス課題を設定した「真正の学習」が有効であると述べている⁽⁶⁾。石井の指摘は、実生活で使える力を育成するための課題の在り方についての指摘であり、実生活で使える書く力の育成を目指す本研究にも当てはまる。本研究における課題発見・解決学習においてもパフォーマンス課題の設定が必要である。

森敏昭（2008）は、実生活で生きて働く力としての子供たちの「活用力」を育成するための条件を学習方法と関連付けて説明している⁽⁷⁾。これを表1に整理する。

表1 活用力を育成するための学習方法

A 理解を伴う学習	課題をよく理解すること。学習の初期段階では、基本的な概念を理解し、既存知識と教材を結び付ける。
B 既存知識に基づく学習	学習内容と教材を関連付ける。既存知識を活性化させ、フォーマルな知識とインフォーマルな知識を整合的に関連させる。
C 領域固有の知識から抽象的な知識へ	文脈を超えた転移をさせるために、複数の文脈を用いたり、他の文脈での適応例を示したりする。特定の文脈に限定されない一般的な課題を与える。
D メタ認知能力の育成	「手続き」を記憶させるのではなく、学習内容の説明、精緻化、モニタリングができる自立した学習者に育てる。

本研究で育成を目指す実生活で必要とされる文章の構成を考えて書く力は、実生活で使える書く力であり、森の言う「活用力」の一種である。森のAからDの指摘は本研究における学習の条件としても有効である。ただし、学習方法の条件Bに関わって森は既存知識との関連付けの必要性のみを指摘しているが、吉田美和（平成26年）らが指摘するように既習事項との関連付けも学習の転移に有効である⁽⁸⁾。よって、本研究では既習事項との関連付けも含む。

以上のことから、本研究では課題発見・解決の学習過程の質を高める課題発見・解決学習の条件を表

2のように整理する。

表2 課題発見・解決学習における学習の条件

⑦	パフォーマンス課題を設定すること
①	課題をよく理解させること
⑦	既存知識、既習事項と関連付けさせること
⑤	複数の文脈で考えさせること
④	自分の学習をメタ認知させること

（3）課題発見・解決学習の学習過程について

「アクション・プラン」では、課題発見・解決学習の学習過程のイメージを「課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・創造・表現、実行、振り返り」と示している。また村田ら（平成28年）は、同じく単元モデルを「課題の発見、見通し、追究、解決、ひろがり、創造」と示している。両者とも「課題発見・設定、課題追究、解決」という大きな枠組みは共通している。それに加え「振り返り」「見通し」「ひろがり・創造」など、各論者の主張に沿って重点的に扱う過程を設定している。先行研究を踏まえ、本研究では「課題発見・設定、課題追究、解決」という大きな枠組みに、学習の条件⑦から④を反映させて「振り返り」「見通し」「ひろがり・創造」の内容を取り入れ、下記のアからエの段階を組み込んだ学習過程を設定した単元構想図を次頁の図1のように提案する。ただし、先述のように「型」へのこだわりには弊害が多いため、この単元構想図は基本的な単元構成の考え方として提示する。

ア 課題の設定

課題の設定の段階では、実生活で起りうる問題を想定して、パフォーマンス課題を設定する（学習の条件⑦）。そのとき児童に課題の文脈をよく分析させ、どのような状況なのか理解させる（学習の条件①）。その上で、例えば「相手に伝わるように書くにはどうすればよいか」等の国語科で学習すべき課題へと変換する。また、その際、「役に立ちそうだ」「この学習は○○でも使えそうだ」という別の文脈で使える見通しを児童にもたせておく。

イ 見通し

見通しの段階では、パフォーマンス課題の解決に必要な学習をより詳細に考えさせる。ここでは、「□□をするためには、どんな力が必要かな」「今まで習ったことを使ってできることはないかな」「新しく何を学習する必要があるかな」等、既存知識や既習事項との関連を理解させる（学習の条件⑦）。そして課題の解決に向けて解決が必要な毎時間の小さな学習課題を理解させる（学習の条件④）。今後の

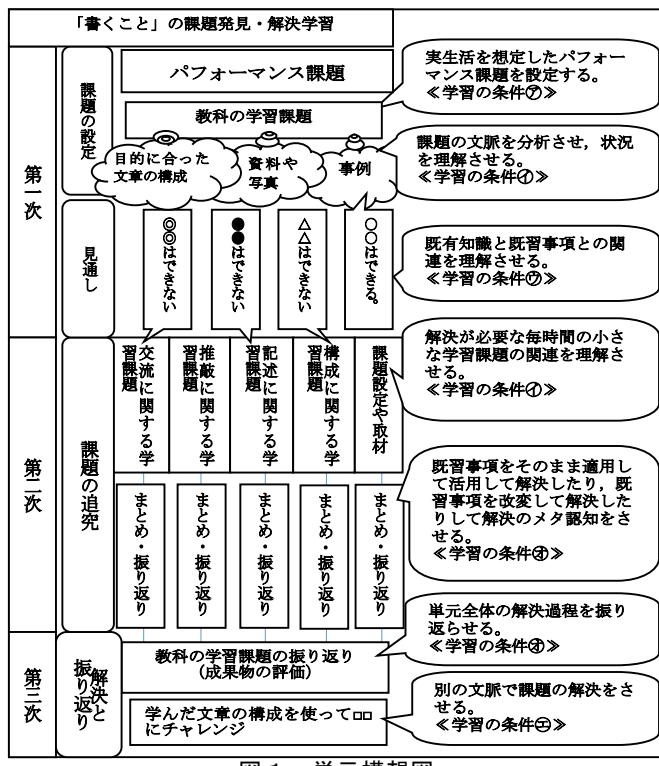
学習計画の見通しを立てさせる。その際、出てきた小さな学習課題を「書くこと」の領域の指導事項に分類させ、「書くこと」の指導事項を意識させる。

ウ 課題の追究

「構成ステップシート」を使い、パフォーマンス課題の解決に向けた小さな学習課題の役割を認識させながら、小さな学習課題を解決させていく。本時までの小さな学習課題の解を組み合わせさせたり、必要に応じて本時までの小さな学習課題の解を見直させたりするなど、小さな学習課題相互の関係を意識させる。その際、既習事項をそのまま適用して解決したり、既習事項を改変し活用して解決したりするなどの解決の過程をメタ認知（モニタリング、コントロール）させることとなる。（学習の条件④）

エ 解決と振り返り

ここでは、小さな学習課題の解を総合してパフォーマンス課題を解決する。そして、課題を発見し解決してきた過程を振り返らせ（学習の条件④）、その書き方が実生活の書く場面でどのように活用できるかを考え、別の文脈の課題を解決させる（学習の条件⑤）。



(4) 「構成ステップシート」の活用について

本研究で活用する「構成ステップシート」は、前項で述べた課題発見・解決学習の段階アからエを位置付け、既習事項や新たに学習する内容などの関係

や児童の課題発見・解決の学習過程を可視化したものである。シートの構成を図2に示し、活用の在り方について明らかにする。

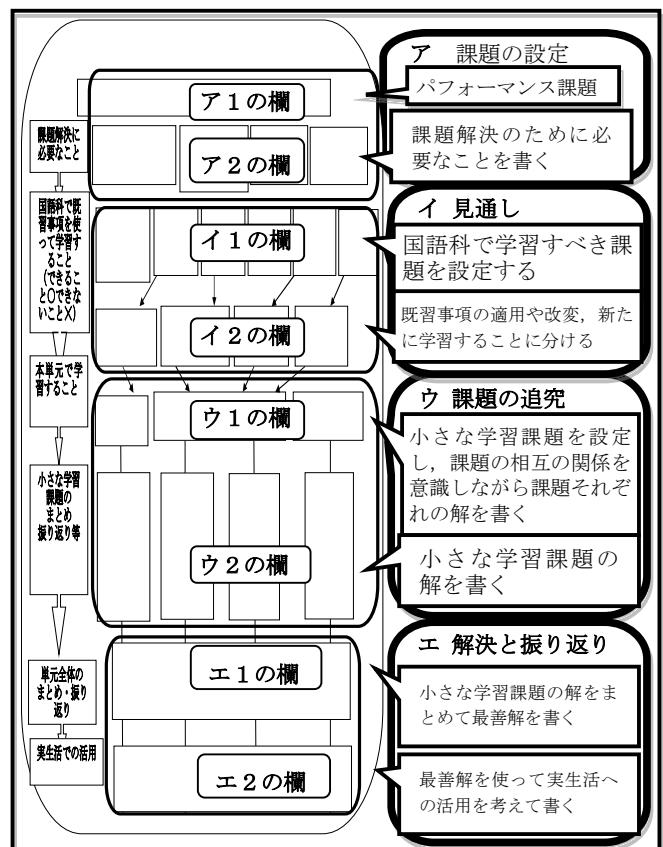


図2 「構成ステップシート」の構成

「ア 課題の設定」の段階では、ア 1の欄にパフォーマンス課題を記入する。続いてア 2の欄にパフォーマンス課題の解決のために必要なことを、付箋に書いて貼らせる。そして内容を交流させ、付箋のうち、国語科で学習すべき内容をア 2の欄から選ばせ、シートのイ 1の欄に貼り換える。

「イ 見通し」の段階では、イ 1の欄の付箋について既習事項でできるもの(○)、既習事項で改変してできるもの(△)、新たに学習すること(×)に分類し、シートのイ 2の欄に○△×いずれかの記号を書かせ、そこから「構成を考えて説得力のある提案文を書く」等、小さな学習課題を立てさせ、学習全体の見通しをもたせる。

「ウ 課題の追究」の段階では、学習の始めに既習事項の活用について考えさせ、どのようにつなげていけば本時の学習が解決できるかのイメージをもたせた上で、課題の追究をさせる。また、それぞれの小さな学習課題相互の関係を意識させ、必要に応じてこれまでの小さな学習課題の解を見直させる。

「エ 解決と振り返り」の段階では、交流などで気付いたことや、自己評価、改善方法を前頁図2のエ1の欄に記入させ、メタ認知させる。そして、小さな学習課題の解をまとめて最善解を導き出し、それらを使って、実生活等での活用を考えさせる。

以上のように児童が「構成ステップシート」を活用し、課題発見・解決の学習過程を意識しながら学習を進めることで、実生活で必要とされる文章の構成を考えて書く力を育てることができると考える。

III 研究の仮説及び検証の視点と方法

1 研究の仮説

「書くこと」の領域の構成の指導事項に焦点を当てた学習において、「構成ステップシート」を活用して、学習の条件に沿った課題発見・解決学習を行えば、実生活で必要とされる文章の構成を考えて書く力を育てることができるであろう。

2 検証の視点と方法

検証の視点と方法について、表3に示す。

表3 検証の視点と方法

検証の視点	方法
実生活の書く状況に応じて、必要とされる文章の構成を選択、改変して書くことができたか。	事前テスト 事後テスト 事前アンケート 事後アンケート 児童のワークシートの分析
「構成ステップシート」を活用した課題発見・解決学習は、実生活で必要とされる文章の構成を考えて書く力を育てるのに有効であったか。	

IV 研究授業について

1 研究授業の概要

- 期間 平成28年6月20日～平成28年6月30日
- 対象 所属校第6学年（3学級95人）
- 単元名 町の未来を考える
- 教材文 「町の幸福論—コミュニティデザインを考える」山崎亮（新しい国語六 東京書籍 平成28年）
- 目標 町づくりについての考えを明確に表現するため必要な文章の構成を考えるとともに、効果的な表現の仕方を使って文章に書くことができる。
- 単元を通した言語活動 地域の人に、大野の町の未来を考えて、町づくりの提案をする。

2 指導計画（全9時間）

次 時	主な学習活動	案する。 (単元を通した言語活動)
一 2・3	パフォーマンス課題から町の未来を考えた提案文を書くことへの見通しをもつ。	地域の人に町の未来を考え、提案する。 (単元を通した言語活動)
	既存知識と既習事項を関連させて、課題解決に必要な小さな学習課題を設定し、今後の学習計画を立てる。	
二 5	教材文とモデル文を比較することを通して、説得力のある提案文の構成を理解し、自分の提案文に活用して書く。	甘日市市の議員さんから、人口増加につながるアイデアを募集するというお手紙を頂きました。甘日市市は、平成24年度から人口減少傾向にあり、このままで市活力も低下してしまうそうです。町の明るい未来を考え、議員さんに提案しましょう。
	本論2（バックキャスティング）について構成の工夫や効果をまとめ。	
	結論の構成や書き方の効果をまとめ、自分の提案文に生かす。	
三 7・8	説得力のある提案文にするために、資料の効果的な書き方や選び方をまとめ。	甘日市市の議員さんから、人口増加につながるアイデアを募集するというお手紙を頂きました。甘日市市は、平成24年度から人口減少傾向にあり、このままで市活力も低下してしまうそうです。町の明るい未来を考え、議員さんに提案しましょう。
	提案文に必要な構成や記述についてまとめ、別の文脈に活用して書く。	

パフォーマンス課題
甘日市市の議員さんから、人口増加につながるアイデアを募集するというお手紙を頂きました。甘日市市は、平成24年度から人口減少傾向にあり、このままで市活力も低下してしまうそうです。町の明るい未来を考え、議員さんに提案しましょう。

V 研究授業の結果分析と考察

1 実生活に必要とされる文章の構成を考えて書くことができたか

(1) 事前テスト・事後テストの結果

事前テストは、図書室の利用の仕方についての意見文を問題文として、平成26年度「基礎・基本」小学校国語タイプI問題四1と同様の形で意見文の構成を問うた問1と「意見」が書かれるべき段落にふさわしい内容を選ぶ問2の2問構成である。事後テストは、問題文を食についての様々な問題の改善策の提案文とした。問題の内容は事前テストと同様である。この結果を図3に示す。

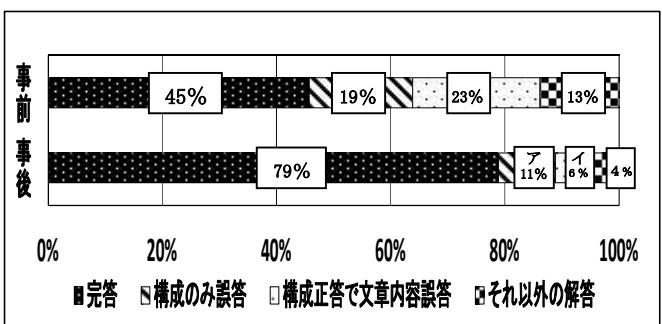


図3 構成についての事前・事後テストの正答率

問1、2両方正答の児童が事前テストの45%から事後テストでは79%と34ポイント向上した。概ね文章の構成を考えることができていた。

一方、事後テスト問1で誤答だった児童（図3のア）は提案文の構成の知識が定着していなかった。また、問2を誤答した児童（図3のイ）は、構成を考えず、自分の提案したいことを選択していた。このことから、構成の知識の定着を図る必要がある。

以上、ほとんどの児童が正答であったことから、文章の構成を考えることは概ねできるようになったといえる。

(2) 提案文の記述

第三次で、実生活の場面を想定したパフォーマンス課題「廿日市市のまち・ひと・しごと戦略」について提案文を作成した。その提案文について、表4の判断基準で判断した結果を図4に示す。

表4 提案文の判断基準

評価	判断基準
A	次の①②の基準を満たし、②の基準に対して二つ以上の内容を書いていている。 ①状況等に応じた適切な文章の構成を選んで、必要に応じて改変して書いてている。 ②目的に応じた内容を書いており、複数の適切な具体例等を挙げて書いてている。
B	①の基準をすべて満たしているが②の基準については一つの適切な具体例等を挙げて書いてている。
C	①②の基準を満たしていない。

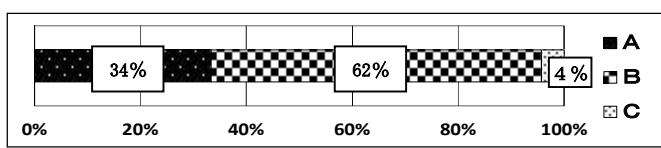


図4のとおり、提案文の記述については、96%の児童がA又はB評価であった。事前テストで「意見」が書かれるべき段落にふさわしい内容を選ぶ問2を誤答した児童のうち、95%の児童がA又はB評価になっている。

(3) 事前調査、適用題の記述

本単元では、実生活で必要とされる文章の構成を考えて書く力を文章の記述で把握するため、事前調査として既習の意見文の構成を活用させて意見文を、単元の後半の適用題として単元で学んだ提案文の構成を活用させて提案文を書かせた。事前調査、適用題とも学校生活の具体的な状況を設定して書かせた。事前調査、適用題のそれぞれの文章の構成の状況を比較し、その変容をみる。二つの文章とともに表4の判断基準で判断した結果を表5に示す。

表5 事前調査と適用題の結果

適用題	A	B	C	計
事前調査	3	1	0	4
A	14	13	0	27
C	8	46	5	59
計	25	60	5	90

(5名欠席したため、総人数は90名である。)

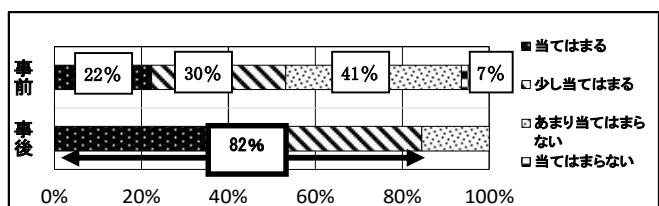
事前調査でA又はB評価であった児童は31人で

あったが、適用題では85人に増えている。事前調査でC評価であった59人のうち、54人は適用題でA又はB評価に向上している。95%の児童が既習の文章の構成を実生活に活用して書くことができている。事前調査、適用題ともにC評価の児童5人は文章の構成の理解が不十分であった。

以上のことから、実生活で必要とされる文章の構成を考えて書く力が育ったといえる。

(4) 事前・事後アンケートの結果

図5は「国語の授業で学習したことを、普段の生活やほかの教科で活用できるか」という質問項目についての児童の変容を示している。



国語で学習したことを活用できると感じている児童が増えている。アンケートでは、どの場面で活用できるかも回答させた。事前アンケートでは、「作文で漢字を使って書いた。」や「習った敬語を使って先生と話した。」など言語についての知識・技能が実生活で活用できるという回答しかなかった。一方、事後アンケートでは「みんなで意見を言い合う場では、構成を意識して話した。」「算数で説明するときに構成に気を付けて書いた。」など、82%の児童が実生活等の場面で構成を活用した、又は活用できると回答した。

以上のことから、児童は、身に付けた実生活で必要とされる文章の構成を考えて書く力が、実生活の場面で使えると実感したといえる。

(1)から(4)より、児童は、実生活で必要とされる文章の構成を考えて書く力を、実生活で実際に活用できる力、実生活で実際に活用しようと思える力として身に付けたといえる。今後、実生活の場面で活用することが期待できる。

2 「構成ステップシート」を活用した課題発見・解決学習は有効であったか

事前テスト誤答から事後テスト完答に向上した児童aの単元の各段階の状況(「構成ステップシート」の記述を次頁図6に示す)と次頁の表6の判断基準

で判断した学級全体の「構成ステップシート」の状況とを合わせて明らかにする。また、「構成ステップシート」を活用した課題発見・解決学習の有効性についても明らかにする。



図6 「構成ステップシート」児童aの記述

表6 各段階の「構成ステップシート」の判断基準

段階	判断基準	適切な内容の児童
課題設定	パフォーマンス課題を理解し、国語科で学習すべき課題を設定している。	92%
見通し	国語科で学習すべき課題と既習事項を関連付けて小さな学習課題を設定している。見通しをもち学習計画を立てている。	95%
課題追究	小さな学習課題を、他の小さな学習課題と関係付けながら追究し解を導出し、まとめている。	91%
解決と振り返り	小さな学習課題の解をまとめて最善解を導出し、書く過程をメタ認知している。実生活等での活用の意識を高めている。他教科で活用して文章を書いている。	86% 97% 60%

※判断基準に合ったものを適切な内容とする。

(1) 課題の設定の段階

「課題の設定」の段階では、地域の方からの依頼をきっかけに大野町の人口を増やすための提案をするというパフォーマンス課題を設定し、そのために必要なことを考えた上で、国語科で学習すべき課題

を設定した。児童aは、当初、音読やポスターの描き方等を挙げていたが、「構成ステップシート」の交流を通して、国語科で学習すべき課題として適切な「説得力のある書き方」「文章の構成」等を国語科で学習すべき課題として設定した。

「構成ステップシート」の記述の分析(以下、「シート分析」とする)によると92%の児童が、児童aと同様に、適切な国語科で学習すべき課題を設定している。

(2) 見通しの段階

「見通し」の段階では、既習の意見文と提案文の比較をすることで、既習事項を適用できること、改変した上で活用すべきこと、新たに学習しなければならないことを考えた。提案文を分析し、できる、分かることに○を、できないこと、分からることに△や×をそれぞれ付けながら「文章の構成」や「書き方」等の課題解決に必要な小さな学習課題を設定した。

児童aは、はじめ国語科で学習すべき課題として挙げた文章の構成について、単純に既習の双括型の意見文の構成を使って序論と結論に自分の意見を書けばよいと考えていた。しかし「構成ステップシート」で、既習事項が使えるかどうか考える中で、既習の「文章の構成」を改変しなければいけないことに気付き、「文章の構成」が重要な小さな学習課題であると判断した。そして、全体交流を踏まえて、小さな学習課題「文章の構成」について序論、本論、結論に分けて考えていくこととした。

「シート分析」によると95%の児童が適切に小さな学習課題を設定し、必然性のある学習計画を立て、単元の学習の見通しをもつことができた。

(3) 課題の追究の段階

「課題の追究」の段階では、毎時間、「構成ステップシート」でこれまでの課題発見・解決の過程を振り返らせ、提案文を書くために本時の小さな学習課題を設定したことを確認させた。それによって、小さな学習課題の解決の必然性、前時までの学習と本時の学習の関係を意識しながら小さな学習課題を追究して解決することができた。

児童aは、小さな学習課題「文章の構成」の序論、本論、結論を書く学習では、既習の意見文と比較しながら提案文における序論、本論、結論の役割について考えて序論、本論、結論を書いた。そのうちの本論を書く時間では、本論で書いた事例を基にした提案の内容と序論で書いた現状と課題の内容にずれがあることに気付き、前時の学習に立ち戻って適切

な序論に書き直した。この学習を踏まえて「構成ステップシート」の小さな学習課題「文章の構成」のまとめには、序論と本論をつなげることが重要であるとまとめた。さらに、この後の結論を書く時間においても、同様に序論、本論を振り返って修正し、適切な構成で提案文を書いた。最終的な「構成ステップシート」の小さな学習課題「文章の構成」のまとめには、序論、本論の内容、序論・本論・結論のつながりについて記述している。

「シート分析」と、児童の文章の分析によると小さな学習課題を解決できた児童は91%であった。

(4) 解決と振り返りの段階

「解決」の段階では、「構成ステップシート」と書いた文章を対応させて、状況に合った適切な提案文の構成になっているか、共感できる文章になっているか等、小さな学習課題が解決できているかを判断しながら、自分なりの最善解となる提案文をまとめた。「シート分析」によると89%の児童が、最善解となる提案文を書くことができた。

「振り返り」の段階では、構成、段落の役割やつながりを視点に、交流、振り返りを行った。

児童aは「自分の序論の意見、本論の事例と自分の提案、結論がズれていれば、説得力のある提案文にならない。」と、文章の構成を意識していなかったから提案文が書けなかったという自らの書く過程でのつまずきをメタ認知して、振り返りをまとめている。「シート分析」では、86%の児童が、自分の書く過程をメタ認知して振り返りをまとめている。

「振り返り」の段階の実生活での活用について考える学習では、実生活の書く場面で、どのような活用ができるか考えた。

児童aは他の場面での活用について、高校入試で活用できると記述した。また、単元後には委員会新聞の一つのコーナーに、低学年向けにシンプルな構成に改変したり、図を用いたりして環境問題についての提案文を書いている。

「シート分析」によると、97%の児童が別の文脈での活用を考えることができた。また、60%の児童は、児童aと同様に単元後に自主学習や他教科等の授業で、今回の学習を活用して文章を書いた。

(1)から(4)のように児童aは、単元を通して「構成ステップシート」によって、課題発見・解決の過程を意識して、必要に応じて修正しながら、適切な構成の提案文を書くことができた。児童aのように「構成ステップシート」を活用して課題発見・解決できた児童の89%が、適用題、事後テストでB

評価以上であった。

以上のことから「構成ステップシート」を活用した課題発見・解決学習は、実生活で必要とされる文章の構成を考えて書く力の育成に有効であったといえる。

VI 研究のまとめ

1 研究の成果

「構成ステップシート」を活用した課題発見・解決学習に取り組むことは、実生活に必要とされる文章の構成を考えて書く力を育てることに有効であることが明確になった。

2 今後の課題

- 事後テストや適用題でC評価であった児童は、振り返りの場面で、お互いの文章の段落の役割等についての評価の視点が曖昧だったために、修正できなかったと考えられる。評価指標を作成するなどして指導を工夫する必要がある。
- 他教科で作成した文章を、「意見を明確にする構成」といった点に重点を置いて修正する授業をするなどして、実生活で活用できる力に高めたい。

【注】

- (1) 文部科学省(平成20年) :『小学校学習指導要領解説国語編』東洋館出版社p. 3に詳しい。
- (2) 文部科学省(平成20年) : 前掲載p. 85に詳しい。
- (3) 田中一郎(2013) :『記述力がメキメキ伸びる! 小学生の作文技術 様式別モデル文&授業アイデア49』明治図書 pp. 11-13に詳しい。
- (4) 文部科学省(平成26年) :『育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方にに関する検討会一論点整理ー』p. 8に詳しい。
- (5) 文部科学省(平成28年) :『アクティブ・ラーニングの視点と資質・能力の育成との関係について特に「深い学び」を実現する観点からー』平成28年3月14日 総則・評価特別部会 資料1-1 p. 1に詳しい。
- (6) 石井英真(2015) :『日本標準ブックレットNo.14 今求められる学力と学びとは—コンピテンシー・ベースのカリキュラムの光と影ー』日本標準p. 41に詳しい。
- (7) 森敏昭(2008) : 安彦忠彦編『新学習指導要領対応「活用力」を育てる授業の考え方と実践』図書文化社pp. 17-22に詳しい。
- (8) 吉田美和・奥本実・野上真二(平成26年) :「課題解決に必要な知識・技能を活用する力を育てる授業の在り方—思考プロセスを踏まえた授業モデルの作成を通してー』『広島県立教育センター研究報告書』p. 48に詳しい。

【引用文献】

- 1) 佐渡島紗織(2009) : 梶田叡一・甲斐睦朗編著『言語力を育てる授業づくり・中学校』図書文化社pp. 85-86
- 2) 広島県教育委員会(平成26年) :『広島版「学びの変革」アクション・プラン』p. 6
- 3) 松尾知明(2014) :『教育課程・方法論 コンピテンシーを育てる授業デザイン』学文社p. 10
- 4) 村田耕一・長尾佳和・脇田崇紀(平成28年) :「コンピテンシーの育成を目指した学習指導の在り方—学習レリバンスに着目した課題発見・解決学習カリキュラムの開発を通してー』『広島県立教育センター研究報告書』p. 64
- 5) 村田耕一・長尾佳和・脇田崇紀(平成28年) : 前掲書p. 67